

幸福のつくりかた

橋 爪 大三郎

皆さんは若くて、私より幸福そうです。しかし今は幸福だとしても、先々不幸になっては困る。もっと幸福になってほしい。私は社会学を専門にしているので、何か役に立つことが言えないかと、今日はいろいろ考えてきました。

1 幸福になる？ 幸福をつくる？

人間は誰でも幸福になろうと思っっています。ふつう、幸福になる、と言います。幸福をつくる、とは言わない。けれど私は、幸福はつくり出せるのではないかと思えます。なる、というのは成り行きです。成り行き待ちではなく、自分でうまく行動すれば、幸福を手にして満足な人生を送れるのではないか。幸福をつくる努力があつていい。でも、努力すれば幸福になれるかという、そんな簡単なものではない。

まず、幸福とは何だろう。答はじつは、わからないでしょう。人それぞれに、幸福になる別々のやり方があるはず。幸福についてのイメージがあつてはじめて、努力が可能になります。幸福が人それぞれだとしたら、他の人と比べても意味がありません。そういう比較は早目にやめて、自分だけの幸福のコツ、価値観をもちましよう。そのコツも皆さんの工夫次第です。

とは言え、人間の一生には、パターンがある。必ず通過する人生の折目節目があり、そこから引き返すことはできません。たとえば子どもを産むか否かは、産む前に考えるべきで、産んでからお腹に戻すことはできませんね。

2 子どもの頃はなぜ幸福だった？

幸福についてのイメージですが、どんな時が幸福だったかと考えてみると、子どもの頃だと思います。あの頃はよかつたなあ。子どもは親に保護されているので、幸福です。とくに赤ん坊は、ニコニコしていればいいのですから簡単ですね。最近の研究によると、赤ん坊がニコニコするのは本能だそうです。赤ん坊に渦巻きを横に二つ並べて見せると、それを追いかけてニコツと笑う。目だと思つているのでしょう。ニコツと笑つてミルクをもらつて生きのびる。これが人間に与えられた本能なのです。泣くのは不幸な状態の表現。あやしてもらつていい状態で眠れて幸福。胎児ならもっと安全です。ところがこの世に出てくる。これは大変な事件で、本当は出て来たくなかつたのかもしれない。それを一生恨んでいるという学説もあるくらいです。保護されて、自立しないのが幸福ならば子どものままでよいのですが、人間はいつまでもそうしてられない。ただ、人間にはそれを懐かしむ気持ちがあるのです。社会学者は人

形を女の子に与えて、抱き方の統計をとつたりしますが、右利き、左利きに関係なく、人形の耳が女の子の心音のよく聞こえる抱き方をします。かつて聴いていた心音を聴くと安心して寝られるし、そのリズムで背中をたたいてもらつと落ち着くし、子守唄も安心できるメロディーになっています。こういう法則は子育てのヒントになりますね。暴走族がカーステレオでロックをかけるのも、母親の心音の再現ではないか。大人になりたくないという気持ちを宣伝して走っているのです。

子どもの頃は幸福だったけれど、もう大人になってしまいました。前を向いて幸福になることを考えましよう。依存ではなく、自立以外に幸福の道はありません。あとは中味です。

3 思春期

子どもはやがて、思春期に入ります。自分は何なのだろうと考え始める。身体の変化も始まり、今まで区別のつかなくなつた男女の違いをいやでも意識する。これからは、ただの女の子ではなく、女性として自分を受けとめなければならぬ。それらしい行動というものも必要だ。男の子への興味も湧いてくるし、将来のこともあれこれ思い悩む。子どもの頃は世の中が違つて見えてきます。そろそろ将来の進路も分かれてくる。個性の違いも目立つようになり、

将来に備えた準備もしなければならぬ。一緒に遊ぶことも少なくなっていくのが、学校を出るのが早かった昔の成り行きでした。最近では皆さん大学まで来るようになりましたから、思春期はほとんど延長され、将来への準備が、学校での勉強になって、今も続いています。

思春期が長くなるというのは、ここ百年くらいの特徴で、長所もありますが短所もある。昔は身体が一人前になるとすぐ、責任を持たされて働きました。女性は十五、六歳で嫁いで子どもを産むし、農家ならば野良仕事もした。その日から大人でした。今はそういう責任は、就職するまでではない。学生だから勉強していればいい。その勉強もついつい手を抜いてしまう。大方の皆さんの関心を集めているのが、ファッション、音楽、ダイエット、お友達とお喋り、最近ではメールもありますし、こういうことに大忙しで、勉強は二の次、三の次。これはやはり、社会的に見ると時間の無駄だなあというのが実感です。

日本中の学生が全部そうなのですが、これは皆さんが学費を自分で払っていないためではないか。日本の大学生は三百万人、一人あたりの年間教育コストは平均百二十八万円、生活費を含めると大体三百万円になるそうです。三百万人が三百万円使うのですから、親の負担は年間九兆円、物凄い金額です。親は苦しい、皆さんは楽しい毎日、というのは世の中不公平ですから、皆さんは学費・生活費は銀行ローンで借りる。そして親は自分のお金は自分で使いまし

よう、という改革案を私は「選択・責任・連帯の教育改革」という本で発表しました。このままでは日本の学生は、ますます自覚が消失するのではないかと思えます。

次に言えることは、これはあつてはならないことですが、若い人たちが自分に甘すぎる。自分に厳しく、同時に自分に優しくして下さい。人があなたに厳しくしたってしょうがないんで、まず、自分で自分に厳しくしなければなりません。あなたに半歩先、一歩先の理想的な自分のイメージがあつて、それに向かって努力していたら、やっぱり忙しいんですよ。今の自分をどんどんレベル・アップしましょう。一方、若い人の何割かは、私はこれも駄目、あれも駄目とどんどん自分を苛めるタイプの人がいます。極端な場合は拒食症なんかにもなる。そうではなくて、根本では自分を肯定して、将来に希望をもつ。

自分に厳しくするのが下手な人が多い理由は、私が思うのに、親が子を叱らないからではないか。皆さんの親御さんは皆さんをちゃんと叱っていますか？ 叱るとするのはエネルギーのいることで、その人を大事に思っていないと叱れません、どういふふうになつたらいいかというアイデアやアドバイスが頭の中ないと叱れません。それが取り敢えずできるのが親です。親が叱ってくれない人は、友人同士、親代わりになつて叱りあいなさい。角度を変えろと、そんなことも可能です。誰かに気にかけてもらつていけば、自分自身を大事にできるし、

人のことも気にかけてあげられるでしょう。

4 仕事をやるへどつこい、まだまだ男の世界

自分に厳しく、かつ優しく、学校生活を送って就職します。ここにいろんな問題があります。日本はまだまだ男女不平等の社会で、社会に出てから、学校の頃とは違うなあと思う人が多い。小学校からずっと共学で学び、世の中に出ていきなり頭を打たれたようなショックと落胆を味わったという女の人の話を聞いたことがあります。考え方が甘かったですね。世の中は学校で教えるようにはなっていない。予め勉強しておくべきでした。そんな中でも、一生、自分の仕事があつて、収入があり、生活が安定し、生き甲斐をもって働き続けるのはすばらしい。ただ、それを貫くのは結構大変です。

私の学校（東京工業大学）は、一学年一〇〇〇人あまりの内、10%くらい女子学生がいます。男子よりも女子のほうがしつかりしていて、入学理由をたずねると、「一生仕事を続けたいんです。何ができるかなって思うとやっぱり（生物）じゃないかと思って。腕力なくてもできるし」とか、高校のころから人生設計を先のほうまで考えて、努力して来ている。なかなか見上げた態度だと思います。私が幼稚園の頃、女の子たちが先生に大きくなったら何になるかを

耳打ちしていたのを覚えています。大部分は「お母さん」「お嫁さん」が多くて、あとは「花屋さん」「パン屋さん」「パーマ屋さん」等でして、女性の仕事はあまりありませんでした。「バスの車掌さん」「電話の交換手」はあこがれの仕事でしたが、今はもう廃れ、その後、女性の仕事で人気となったのは「学校の先生」です。これはわりに男女平等で長く続けられるいい職場でしたが、近年、子どもが減って新規採用がほとんどありません。

一般企業はどうか。バブルの後遺症で景気は悪く、採用を手控えたり、リストラしている最中に、同時多発テロでドルは下落、株も下がるのでアメリカの景気が悪くなり、日本にも響いて来年（二〇〇二年）、再来年の就職は大変危ないですね。銀行はほとんど潰れるし、これまでたくさん採用していたところも傾き、経済の先行きは暗い。少し長期的に考えないと皆さんの職場は確保しにくいでしょう。今から準備して丁度いいですね。長く続けることを考えると（途中一回休職してもいいですが）、働く能力を身につけること、資格、手に職を得ることが大事ですし、家族、特に将来の夫の理解も大切です。それと本人の根性、努力です。

一般企業のシステムは男性中心だそうです。男女同時に入社して、五年、十年経つと、女性の方が能力があつても一年後輩の男性が係長になったりして全然面白くない、といった会社が多い。結婚して、子どもも生まれるし、いったん家に入ろうかと思うのが割合多いパターンで

す。日本の女性は、なるべく仕事を続けるキャリア志向タイプと、専業主婦志向、つまり就職はするけれども結婚すると家庭に入るタイプに大別される。後者が少し多くて、多数派になっています。双方なかなか厳しい。共働きの場合、日本の男性は家事をしませんから夫の協力は期待できません。いろんな統計がありますが、世界で一番家事をしないのが日本の男性です。三十代、四十代男性の家事労働時間は一週間たった十五分。ですから女性は会社で働いて、残業もこなして、家へ帰って帰ってご飯つくって、炊事洗濯全部やって、私は一体何やってんだらう？ ということになる。家事大好きのいい夫ならいいですが、そういう人は見つけにくいことを覚悟しなければなりません。

では専業主婦はどうか。これは、生活水準が下がることを覚悟しなければならない。結婚するまでは自宅から通勤して、個室もあるし、家には何でもあつて、給料は全部自分の小遣い、海外旅行もコンサートもグルメも、楽しんでた。結婚したら全てガマン。夫の給料で家賃を払い、なんだかんだと出費が高む。それくらいなら結婚しない方がましだという人が増え、親元にいる独身者をパラサイト・シングルといいます。専業主婦は文化的生活を諦めなければならず、キャリア志向の女性はもう、ほとんど時間に余裕がない。何かうまい手はないでしょうか。それなりに収入のある、中年、青年実業家と結婚するというのもパターンですが、夫が

年をとってからが大変だという欠点があります。妻の孤独な老後が三十年待っています。気をつけましょう。

労働力化率のグラフというのがあつて、日本女性はM字型曲線を描きます。働く女性の割合は、まず上がつて（卒業後の就職）、少し下がり（寿退社あるいは出産後退社）、また少し上がつて（パートを含む再就職）、下がる（退職）という形です。欧米は台形で、途中で仕事をやめます。日本でも、深く切れ込んでいたM字の谷間が最近は大分浅くなり平らに近づいてはいます。企業で働いて、あまり良くない待遇でも大多数の女性がまあいいやと思えたのは結婚、永久就職に夢や憧れがもてたからです。結婚とは、そんな甘いものではないという話をつぎにします。

5 結婚するへ一生に一度の大博打

恋愛と結婚に関して、私はいくつかの法則を考えました。

《恋愛不平等・結婚平等の法則》

恋愛は大変に不平等です。星の数ほど恋愛のチャンスがあつて恋愛しっぱなしの人と、ちつともそういう話がなくてほとんど経験のない人もいます。ところが日本人の九割ぐらいは結婚

します。ということは、その気になつて真剣に結婚を考えればほぼ全員ができるわけで、結婚は平等です。恋愛は、あまり時間が拘束されないので極端な場合、複数の同時進行も可能。そして永続するとは限らないし、時間的にも短めです。だから得意な人は繰り返し行なえる。結婚は、一夫一婦制のおかげで生活を共にしますから、既婚者とは結婚できない。残った人が順送りになり、適当なところで妥協して、現実的に相手を選ぶ。相手も同じ考えで、大多数が結婚します。恋愛結婚の場合も、恋愛の延長上に結婚があるわけではなく、ちょっと頭を切り換えたところに結婚がある。結論は、恋愛が下手な人でも結婚のチャンスはある、ということ

《恋人さがし3カ月の法則》

日本では恋愛結婚といつても、データによると3パターンあり、社内結婚、学生時代に知り合った者同士の結婚、そして同じグループで知り合った者同士の結婚が大部分です。皆さんも社内結婚に期待していると思います。新しい職場に入ると、デートの誘いやコンパがいろいろあるでしょう。ところが、3カ月以内にパートナーが見つからない場合、そのあと見つかる可能性はゼロに近い、というのが過去の統計です。つまり入社後3カ月が勝負。駄目だった場合はあきらめて、どこか他所で探しましょう。良さそうな人はたくさんいると思いますが、問題

は相手にも選ぶ権利があることを忘れてはいけません。では、相手に自分のどこを気に入ってもらえばいいのでしょうか。

《美人ふしあわせの法則》

社会学者として言わせてもらおうと、見栄えのいい美人は幸福になりにくい。普通が一番です。理由は、まず、女性同士の妬み、嫉みというのがあり、美人は特に同性から嫌われやすいうえに、ちょっとした欠点もいろいろあげつらわれて、人間関係が築きにくい。これは美人その人にも責任があります。美人は、自分が美人で当然だと思つていて、きれいですねと誉められても嬉しくも何ともない。仕事が良くできるねとか、性格がいいねとか、違うところで誉めて欲しいのに、誰もがきれいだねと言うから、フン！と思つてツンとする。するとお高くとまつて生意気だ、性格が悪い、と言われてしまう。男のちやほやにも原因があつて、人間関係は時間をかけて築くものなのだが、時間がない場合、相手を理解する一番手取り早い方法は「外見」ですから、そこをちやほやする。勘違いした美人は実力もないのに「私は結構イケてるかも」なんて思つてしまう。つき合ってみると、「何だ、大した人間じゃないのか」と評価が下がり、長期的な人間関係を築くのが難しい。結論として美人は一生、結構苦労します。美人が結婚しやすかったり、幸福になりやすいとは、全く言えません。

相手を見つめるには、ストライク・ゾーンを広くする。具体的に男性と知り合う前に収入や身長が高くないなどと勝手に決め、敷居を高くしてターゲットを狭めないこと。元々知りあう男性が少ないのですから、ますます難しくなります。「どんな相手でも一応大丈夫」「少々難あり大歓迎」の構えでいきましょう。人間は大体、少々難あるものなのです。そこに目をつぶればいいところが見えてきます。ところで東工大は、「合コンしたくない大学」ランキング一位なんです。髪の毛ボサボサ、実験ばかりして何年も女の子と口をきいていない変人、のイメージが一人歩きしているようです。実態はそうでもなくて、最近ではジャーニーズ系のさわやか青年もたくさんいますので、皆さんどうかよろしく。

《離婚50%の法則》

さて、目出たく結婚。昔はこれで一安心でしたが、日本の離婚率はどんどん上がって、そろそろ三組に二組が離婚する計算です。これは過去に結婚した人が今離婚している割合であつて、皆さんが将来離婚する割合はまだ判りません。私の予測では、皆さんが離婚する割合はもっと高くて50%です。理由は、アメリカの離婚率が50%だからです。なぜアメリカは二組に二組が離婚するのか。それは愛情を大切にしているからです。愛情がなくなれば即、離婚。愛情を保ち続けるのは難しいことですから、50%の結婚は破綻すると考えてよいのです。日本がそま

でいっていない理由は、家庭内離婚、仮面夫婦が多いからです。子どもの手前、親の手前、世間で、愛情も一緒にいる理由もないけど続けているのが多い。推理小説によくあるように、だんだん殺意が高まってくる。それくらいなら、離婚したほうがいいですね。離婚すれば、また結婚できるんですから。

6 子どもを育てるへ変なところが親に似る

子どもは放っておいてもどんどん大きくなるので、そんなに手間をかけなくてもいい。遊んでいけば幸福なんです。だけど、最近の子どもはちよつと心配。将来、子育ての際注意していただきたいのは、構いすぎないことです。構いすぎると自立心が育ちません。

それよりも子どもを遊ばせて下さい。遊んでいる時は自分が主人公、世界の中心です。時空をとびこえたヒーロー、なにかも自由です。ただし、大人が見ていなければ。大人が見ていると、この主人公の感覚がもてないのです。そろそろ一人歩きできるようになったところの、公園デビュー。私も見てきましたが、砂場でも、子ども一人に対してお母さんが一人、マン・ツマンで操り人形のように監視して遊ばせている、こんなの遊びでも何でもないです。それくらいなら、空地や原っぱに連れていったほうがまだよろしい。

それから、自分の子と他の子を比べない。子どもはみんな違うのです。比べられる子どもは傷つくし不幸です。いいところを真似るのなら、それはほとんどやってください。お母さんは、自分と他人との比較がすむと、自分の子と他人の子を比べようとしがちですが、これはやめましょう。

そして必要な時にはしっかりと叱る。叱られないまま大人になると自分に自信が持てなくなる。子どものうちは叱ってやりましょう。これは感情に任せて怒ることではありません。まず、言葉遣いを正しくする。嘘をつかない。遅刻しない。泥棒はいけない。嘘をつくことは人をごまかすことで、それは簡単なことだけれども、いったん癖がつくと自分にも厳しくできないし、相手にも信頼されないし、そうやって人間関係が破壊されてお前も幸福になれないよ、というふうにも解りやすい言葉で叱ってやります。でも一時間が限度です。子どもは定期的な、一回ひとつのことをガンと叱ること。グラグラ叱り、ついで叱りは駄目です。叱り方にもいろいろ原則がありますから、育児書等で勉強して正しく躰けるようにしましょう。

日本のお母さんは子どもを構いすぎるから、男の子はマザー・コンプレックスになりがちです。母親から精神的に自立できない現象ですが、こういう男と結婚すると後が大変です。何かの間違いでマザコン男と結婚した。夫は母親の言いなりであなたを構ってくれない。おまけに

会社人間だったりすると、相手は自分の子どもだけだから、自分の思うような立派な人間に育てようとして、構いすぎる。そこで子どもはマザコン少年となり、成長してマザコン男となる。その彼が結婚する。これがマザコン男の再生産の構造です。この甘えの構造をきっぱり断ち切り、子どもと自分は所詮は別の人間と割り切つて、いわば借物物と考えて育てた方が気が楽だと思えます。子どもを自分の生き甲斐にするのはやめましょう。それは、生き甲斐を見つけないで、見つける努力をちゃんとしていない人のすることです。

7 熟年を迎えるへ転ばぬ先の杖

やがて、仕事人間だった夫が退職して一日家に居るようになりますが、これがまた難物です。男性はたいがい会社のことしか知りませんから、定年を迎えて家に帰ると抜け殻のようになる。地元知り合いもない。ボランティアやるでもなく家事を手伝うでもない。ポカンとしている姿は妻からみれば粗大ゴミか濡れ落ち葉。妻ははたと気づく。今まではほとんど一緒にいる時間がなかったから我慢できたんだ。それで、今大流行なのが熟年離婚です。子どもも育つて、あなたも定年退職したのだからこのさい離婚させて下さい、と三行半を突きつける。熟年離婚しないまでも、夫とどう付き合っていくかは大変な問題です。

妻がもつと大変なのは、その上に介護の苦勞がある。老人相手の介護は、介護者も老人である場合が多く、九十歳の人を七十歳の人が世話してたりして、大変です。皆さんの場合、冷静に考えると五人の人間を介護する可能性がある。自分の父母、夫の父母、そして夫。一人に二年かかるとして十年間。時期が重なるもつと大変、といった事態が将来に待っている。介護は身内がせずに、社会的介護という考え方もありますけれど、いまの介護保険は、ヘルパーさんはあくまで援軍であり助太刀で、主として介護するのはお嫁さんや娘さんということになっています。

加えて孫の世話。日本女性は結婚後、ことに出産後は、実の母親の近くに住む割合が高い。理由は、子どもを預けやすいからです。お祖母さんからしてみると、娘が片付いてやれやれ、これから海外旅行でもと思うところに孫を預かることになる。走り回る孫を追いかけ食事させたり寝かせたり、それだけでくたくたです。夫の世話、介護、そして孫の世話と、熟年女性は非常に多忙。むしろ三十代、四十代の女性の方は最近暇で、それから後が大変になっていくのです。日本人女性は元気で是非、素敵なおばあさんを目指して下さい。

介護が終わると夫が亡くなる。いつごろになるか。今年(二〇〇一年)の男性の平均寿命が七十七・六歳、女性が八十四・六歳。この通りにいくわけではありませんが、皆さんも大体、

男性より七年長く生きます。夫が五歳上だとすると平均で夫の死後十二年生きることになります。もし年齢の離れた青年実業家と結婚したら、その場合は三十年の一人暮らしを覚悟しなければなりません。おおむね、晩年は十年以上の一人暮らしというのが平均的な姿です。これをどうするか。年下の男性と結婚するという手があつて、うまくいけば夫に介護してもらえませんか。いずれにしても、これが晩年です。

8 終わりよければ、すべてよし

うまい死に方。死ぬのにはお金がかかる。ターミナル・ケアで病院に入るといろんな管を付けられてユニットに入れられて、いろんな注射をされて、末期医療が施されます。平均で約三百万円かかります。そしてお葬式や何やかやでまたお金がかかる。先々何が起るかかわらないから、お年寄りには皆、貯金をして、貯金があつても質素に暮らしているのです。平均二千万から三千万円の貯金がありながら、使わないで死んで相続税とられて、日本は何という国なんだろうと思いますが、これが実態です。皆さんも今の社会制度のままだと、六十代、七十代で貯金がかなりないと安心できない。

まず年金。これはよくできた制度で、生きている限りもらえますから、加入するのはいいこ

とです。ところが、今の年金は赤字です。六十五歳以上の年金受給資格者は人口の十二%で、働いている人四人でお年寄り一人を面倒見ている計算になる。そして二十年後の六十五歳以上の割合はピークを迎えて二十五%で世界最高になる。その時は働く人二人で一人のお年寄りを養う計算になる。これでは年金パンクです。払ったお金より、もらうお金の方が少なくなる。将来の生活は年金だけに頼れませんか、老後の蓄えをしなければならぬ。夫に莫大な生命保険をかけるという方法もあるかもしれません。そのへんはいろいろ工夫して下さい。

お年寄りの特徴は、お金があつても元気がないので生活を楽しめない。若い時代は元気はあつてもあまりお金がないので、あれこれ我慢しなければならぬのと反対で、なかなか世の中うまくいきませんね。そうがっかりしていてもしょうがないので、体はきかないけれど、まだまだ使える部分や能力があるのだから、それを使って楽しいことをしましょう、というふうなプラス思考で生きること。これを日頃、若い頃から考えておくと思います。私の学生が「高齢者体感キット」を製作しました。彼等の体験によると、「生きていくだけで大変だ」「ラーメンが食べられなかった」「切符を買おうとしたがお金が入らなかった」「小さな段差も上れない」そうです。こういう時期がやがて来るのだと、心の隅に置いて下さい。

お墓も高い。先祖の墓は次々無縁仏として整理されているのですし、これ以上お墓を作るの

は無駄だと思います。お墓はやめて、骨はその辺に撒いて、ホームページにお参りする。それで充分としたらどうでしょう。戒名も高い。何百万もする。私の友人の研究によると、戒名なんて昔はなかったし、仏教の原則とは関係ないのです。そこで、戒名はつけない。つけないのが心配な方のために私は、戒名をつけるNGOを設立してボランティアでもしようかと思つているくらいです。相続税も高い。相続財産ののこし方もむずかしい。一人っ子的場合、なまじ財産があるとそれをあてにして自立心が育たない傾向が強い。そういう子のためにも、財産は使い切る。子どもが複数の場合も、それをめぐって喧嘩になりやすいので、やはり使い切る。皆さんはこうした家族のしがらみを離れて、自分らしいポリシーを考えて下さい。

人間は最後に死にますが、それが全くマイナスなことでしょうか。観察していますと、そうでもないような気がします。人間は生まれた時には、人の世話になりながら成長する。その後、皆さんのような時期を経て自立、一人前の大人になる。その後、年とつてもう一回、人の世話になりながら死んでいきます。

人の世話になりながら死ぬということとは、人間に対する戒めだと思えます。すなわち、「あなたは一人で生きているではありませんよ、人間のネットワークに助けられながら生きていくのだから、傲慢なエゴイストとして年をとると必ず酷いめに遭うからね。あなたが、子ども

をしつかり育てて、夫ともいい関係をつくって、地域や友人ときちんとした関係をつくる。そうしたネットワークを財産として、あなたの周りに、あなたを理解するいい人たちがいるのなら、必ず、年とつた時にあなたを助けてくれる人がたくさん現れてきますよ。」

老後におかれた状況は、結局はその人が一生をかけて創り出した財産です。そういう目標があるからこそ、それまでのいろんな折節に頑張れる。このネットワークが財産だと思えるようになれば、あなたは幸福だと私は思います。

最後に、東京工業大学で教鞭をとられ、昭和女子大学教授となられた川嶋至先生から、この春、私はこの講演のお話をいただきました。お会いするのを楽しみにしておりましたが、川嶋先生は去る七月二日、心臓病でお亡くなりになりました。このご縁に感謝するとともに、先生のご冥福をお祈りいたします。

(平成十三年十月六日・於人見記念講堂)

「テレビのディレクターになったから」

なぜ社会学を専攻して選んだのかと尋ねると、宮台真司の口からはこの答えが返ってきた。

「高校の頃から映画にハマっていて、テレビや映像の仕事がしたかった。テレビ局には社会学科が多いと知っていたから、それで社会学へ行こうと思った」

テレビ業界志望の映画青年が、なぜ社会学者を職業として選び、やがて社会学の枠を超えた言論活動を繰り広げるようになったのか。そこには八〇年代という時代背景と、さまざまな思想家たちとの出会いがあった。

一九七八年に宮台が東京大学文芸三類に入学した当時、東大駒場キャンパスの社会学教室には、見田宗介というスターがいた。本名と筆名「真木悠介」を使い分けて、「現代社会の社会意識」「現代社会の存立構造」など、刺激的な著作を次々と送り出していた見田は、カリスマ的な人気を博していた。彼が二・三年生向けに開講していた「一般教養ゼミは、社会学を志す学生たちで溢れていた」

宮台もまた見田ゼミの一員だった。ただ、宮台の見田に対する見方は、他の学生たちとは違っていた。「ゼミの他の学生は、コミュニケーションとしての『真木悠介』に傾倒していたけれど、見田さんの本質は統計や理論を重視する近代主義者『真木悠介』の顔は仮面にすぎない。僕は思

っていた。見田さんのそういう部分、『真木悠介』でない部分に強く啓発された」

駒場時代、見田と並んで宮台に影響を与えたのは、『存在と意味』『物象化論の構造』などで知られる哲学者・廣松渉だった。宮台は廣松の研究室を直接訪ねてその聲に接し、私淑することになる。

「廣松さんにも二つの顔、二面性があった。真理を追究する哲学者としての側面と、政治的な側面。廣松さんは一般にはマルクス主義者として理解されているけれど、その根底には実は重層主義があった。この重層主義こそ彼の本質で、哲学者というのは仮面ではない。そして仮面だからこそ、過剰なまでに真理の追究を行う人だった。廣松さんのまわりにはたくさんエビゴネンがいたけれど、重層主義者という本質を理解していたのは僕だけだったと思う」

「廣松さんにしても見田さんにしても、僕が本音に関心を持った部分はその二重性。一般に本業と思われている仕事は仮面、『ネタ』にすぎないという点だった」

駒場での二年間を終え、八〇年に本郷の文学部社会学科へ進んだ宮台は、ドイツの社会学者ニクラス・ルーマンに触発されて、社会システム論に取り組み。その場となったのは、七四年に当時大学院生だった橋爪大三郎、山本泰、江原山美子らが始めた「言語研究会」と、やはり橋爪らが中心になっ

て立ち上げた雑誌「ソシオロギス」だった。この二つは、従来のオーソドックスな社会学に飽き足らない学生たちの拠点となり、八〇年代前半には、大澤真幸、宮台、吉見俊哉、立岩真也、橋爪次郎、佐藤俊樹ら、やがて九〇年代の論壇に「社会学の時代」を築き上げる俊英たちを輩出するようになる。

「言語研究会」「ソシオロギス」双方の中心人物であった橋爪大三郎は、当時は振り返ってこう語る。

「八〇年代になると、政治学とか経済学とか、戦後を支えてきたフレームが効力を失って、社会の実質が変化しつつあった。そうしたパラダイムの転換期だったから、社会学という枠もかなり緩くなり、何でも自由にできるようになってきた。それが、あの世代にいろいろな人たちが出てきた理由のひとつじゃないか。その代表が宮台さんや大澤さんだった」

橋爪や大澤の存在は、宮台自身の進路決定にも大きな影響を及ぼした。

「当時の東大社会学科には、好き勝手なことをやっても許されるといふ雰囲気があった。橋爪さんや大澤さんはその象徴のような感じ。僕はもともとマスコミ志望だったけれど、これなら学者になってもいいかと思った」

ただ、学問的な立場では、「自分は社会学科の中では異質な存在だった」と宮台は言う。

「橋爪さんは構造主義、大澤さんは後期現象学に興味を持

の理論を知る必要さえなかった。彼らには、僕や大澤さんのような過剰な理論志向は、不可解なものに映っていたんじゃないか」

この時期の宮台が、在野の政治学者・小室直樹に親炙し、本郷にあった私塾に通い詰めた背景にも、そうした「過剰なまでの理論志向」と関係があった。

「小室さんにも過剰さと二重性がある。ウルトラ近代主義者でありながら、ウルトラ天皇主義者でもある(笑)。僕はそこに興味を持った」

「過剰な合理主義の背後に不合理的な情念がある。理論過剰な人間のモチベーションは非論理的なものである。見田さん、廣松さんも同じで、二人とも非常に合理的な思想家だけ

ていた。僕は当時ルーマンに熱中していて、言説の機能を重視する機能主義の立場で一貫していた。そういう意味では、橋爪さんに近い立場で、大澤さんとは対照的だった」

しかし、宮台より十一歳年上の橋爪から見ると、宮台と大澤の間には、立ち位置の違いよりもむしろ共通性が目についたようだ。

「あの二人はいつも一緒にいて、いつも意見が違ふといつて議論していたけれど、傍から見ているとよく似ている。『鏡の国のアリス』に出てくるトゥイードルダムとトゥイードルデーという双子みたいな感じ(笑)。もちろん、二人の資質は非常に違う。大澤さんは、個人の自我を押し下げていくと、ある無垢な原点があるという前提において、見田さんなんかに近い。でも宮台さんは、そういう無垢な場所があるとは考えず、システムが自我に投影され、システムによって操作される可能性をつねに担保しようとする。そういう点でたしかに肌合いが違うけれど、二人はその違いを超えて同時代感覚を共有し、同じ空気を吸っていた」

そうした同時代性を感じたことは、宮台自身も認めている。

「僕や大澤さんの世代までは、まずマルクス主義というものがあった。それを理論的にどう中和するかという課題があった。僕たちに過剰な理論志向が存在するのはそのせいだと思

う。ただ、僕たちより下の世代になると、もうマルクス主義

ど、その理論的な著作からは推し量りがたい過剰な情念を感じる。それでいいんだということを示してくれた点で、小室さんの影響は非常に大きかった」

いま、宮台はもつとも多忙な学者のひとりだろう。都立大での講義のかたわら、次々に著作を上梓し、テレビやラジオへの出演や、さまざまな講演、シンポジウム、対談をこなす。論じる対象も社会学の範疇を超え、政治、教育問題、宗教、セックスまで、「何が本業と言えはいいのかわからない。自己紹介に困るときがある」と本人が語るほど多岐にわたる。

そのエネルギーで、「本業がわからない」ほど幅広い仕事ぶりは、宮台が三人の「恩師」の共通項として挙げた「過剰さ」と「二重性」という言葉を思い起こさせる。この二つのキーワードは、そのまま宮台自身にもあてはまるのではないだろうか。

「たしかにそういう志向はあるかもしれない。もし僕に過剰さがあるとしたら、やはり見田、廣松、小室といった人たちとの接触によって作られてきたような気がする。過剰さを持つた人間がいると、その過剰さにたまたま乗ってしまうエビゴネンが集まる。でも僕は、誰かの過剰さに共鳴すると、その過剰さを自分で引き受けようとしてきたから」

その内なる「過剰さ」に駆り立てられるかのように、宮台真司は時代の先端を走り続けている。(文中敬称略)

